

主 題：信仰の自己判断 3 =靈的な信仰者=
 聖書箇所：コロサイ人への手紙 1章9-10節

私たちはコリント教会の会衆に対して為したパウロの叱責から「靈的幼子」について学んで来ました。靈的にまだまだ成長していない幼子の姿、それを私たちは見たわけです。三つのことが記されていました。一つは彼らは「ねたみ」に満ちた者たちでした。ですから、彼らの中にはだれかに対する強い憤り、怒りや恨みなどがあったのです。また、彼らには「争い」があったことを見ました。意見の相違や論争などが原因で争いが起こっている状態です。ですから、教会の中で人々は互いに悪口を言い合っていたり、けなし合っていたのです。本来ならそれぞれの信仰を高め合うべきところが全くそうでなかったことを学びました。まさに靈的幼子の姿です。同時に、「分派」、彼らは靈的一致のために努力するところを却ってその一致を乱しているような状態でした。このような靈的幼子であってはならないとパウロは言いました。

そして、これらの問題点がどこにあるのかも見ました。問題は「自我」でした。自我によって自分自身の心がコントロールされてしまっている。また、そのことを許してしまっている人たちであると言えます。私たちは自分のうちに存在する自我を殺し続けていくことが必要なのです。自分の思いではなく神のみこころに沿って生きて行こうとするのですが、残念ながら、この人たちはみこころよりも自分たちの思いが優先されていたのです。このように自分中心の考えや思いによって歩んでいるということをお前回見たのです。私たちはそこからスタートして来たわけですが、信仰において成長したいものです。

そこで今日私たちが見ていくのは「靈的成人」についてです。靈的に成長した人、その人はどのような人なのか？私たちが目指すべき信仰者とはどのような人なのか？そのことをごいっしょに見ていきたいと思えます。テキストはコロサイ人への手紙1章9節からです。9節の初めは「こういうわけで」という接続詞で始まっていることに気付かれるでしょう。間違いなく、このことばはその前の文章に掛っていることが分かります。いったい、パウロはこの9節までに何を語って来たのでしょうか？パウロはコロサイ教会の聖徒たちが靈的に成長しているというメッセージを聞きます。4節に「それは、キリスト・イエスに対するあなたがたの信仰と、すべての聖徒に対してあなたがたが抱えている愛のことを聞いたからです。」と書かれているように、パウロはこのすばらしいニュースを聞いたのです。教会の聖徒たちが愛と信仰において成長していると。そのコロサイ教会の靈の様子を伝えたのがエパfrasでした。

この人物のことはよく分かりませんが7節にそのことが記されています。「これはあなたがたが私たちと同じもべである愛するエパfrasから学んだとおりのものです。彼は私たちに代わって仕えている忠実な、キリストの仕え人であって、」と。エパfrasは聖霊なる神が彼らをキリストに似た者へと変え続けている様子を伝えるわけです。信仰に与った者たちが信仰において成長していると、このニュースを聞く以上にパウロの心を喜びに満たしたものはなかったでしょう。それゆえに彼は3節にあるように神への感謝を表わしています。「私たちは、いつもあなたがたのために祈り、私たちの主イエス・キリストの父なる神に感謝しています。」と。なぜなら、神が彼らを成長させておられることを知ったからです。

このようなすばらしいニュースを聞いたパウロは「あなたたちのために祈っている」というメッセージを送るのです。実際に、9節から12節まではパウロがコロサイの聖徒たちのためにとりなしをしているその祈りの内容が書かれています。信仰において成長している彼らにいったいパウロは何を祈ったのか？信仰者たちが益々成長していくことを願うのです。

☆パウロの祈り

彼が祈った大きな祈りは二つです。一つはこのコロサイ聖徒たちが「主のみこころが何かを常に見極めることのできる人になっていく」ことです。主のみこころをしっかりと見極めてその判断ができる、そういう人に成長することです。二つ目は「主のみこころにいつも従う人になる」ことです。彼らがこのように成長していくことを願ったのです。それがこの祈りの中に出ています。つまり、靈的に成長した人、靈的な大人の特徴とは「みこころを正しく見極めることができ、そのみこころに従い続けている」

ことです。

1：9「こういうわけで、私たちはそのことを聞いた日から、絶えずあなたがたのために祈り求めています。どうか、あなたがたがあらゆる霊的な知恵と理解力によって、神のみこころに関する真の知識に満たされますように。」

A. 主のみこころが何かを常に見極めることができる人になること 9節

パウロがコロサイ教会の聖徒たちのためにまず祈ったことは、彼らが「神のみこころに関する真の知識に満たされ」ることでした。

1. 「神のみこころに関する真の知識に満たされる」とは？

1) 神のみこころ : このことばは名詞で「神の栄光を表すために私たち人間が為すべきこと」です。神が「このようでありなさい」とか「このようにしなさい」と私たちに命じておられること、それも「みこころ」です。まさに、神から与えられた人生、私たちの存在そのもののガイドラインだということができでしょう。ですから、神のみこころに従うことによってのみ、神の栄光を現すことができるのです。神の栄光を現したいなら、神のすばらしさを証したければ、私たちがすることはただ一つです。それは「神のみこころに従うこと」です。それ以外の方法で神の栄光を現すことはできません。

イエスご自身の歩みを見た時に私たちはそのことを教えられます。主イエス・キリストの歩みは父なる神のみこころに完璧に従われた。それゆえに、彼は父なる神の栄光を現し続けていました。ヨハネの福音書17：4「あなたがわたしに行わせるためにお与えになったわざを、わたしは成し遂げて、地上であなたの栄光を現しました。」と、主イエス・キリストは常に神の栄光を現し続けておられました。どんな方法によってですか？父なる神のみこころに従い続けることによってです。

私たちにも同じことが言えます。神の栄光を現すために造られた私たち、でも、その目的から全く逸脱した私たちを神はこの救いへと招いてくださったのです。本来、私たちが造られ、また、存在する目的は全く変わっていません。私たちが神の栄光を現すために生きているのです。そのために神のみこころに従い続けて行くのです。

2) 真の知識 : これは二つのことばから成り立っています。「～に向かって」と「理解する」という二つの単語が合成されてできています。つまり、何かに対する深く完全な正確な理解力、うわべだけでない深い理解力です。また、物事をはっきり見分けることができる、また、判断できる力です。つまり、神のみこころに関することですから、みこころを正確に理解しそれを見分け判断する力のことです。神のみこころが何かを正しく理解する、判断する力です。

3) 満たされる : この動詞は「いっぱいにする、欠けているところを満たす、完全にする、完成する」という意味があります。また「支配される」という意味もあります。パウロはここでこのコロサイの聖徒たちが神のみこころを正確に理解し、正確に見分け判断し、そして、そのみこころに支配され続けていくこと、そのことを祈っているのです。

ここに描ける信仰者像というのは、どんなことがあってもその中で神のみこころがいったい何かということを見極めることのできる人、しかも、そのみこころに支配されながら歩み続けている人、そのような姿をパウロはここに描いているのです。それがまさに霊的な大人の姿であると言うのです。

2. みこころに関する真の知識を得る方法

9節には「どうか、あなたがたがあらゆる霊的な知恵と理解力によって、神のみこころに関する…」とあります。パウロはここで「どのようにすれば神のみこころに関する真の知識に満たされることができなのか？」ということをお話します。どうすれば神のみこころを正確に汲み取って、正確に見極めて、そして、それに支配され続けるような信仰者になれるのか？パウロは「あらゆる霊的な知恵と理解力によって」それが可能になると言います。

1) 知恵 : 「知恵」とは「神のメッセージを正確に理解する知恵」のことです。なぜ、聖書が大切なのか？Ⅱテモテ3：15にある通りです。「…聖書はあなたに知恵を与えてキリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができるのです。」と。今、私たちが見ているのは神のみこころのことです。私たちが知恵ある人の所に行ってその人の知恵を聞きたいと思えます。私たちがこれから先のことを聞きたければ、それを知っている人の所に行くべきです。私たちがどうすれば幸せになるのかを知りたければ、その答えを持っている所に行くべきです。死んでからどうなるのかを知りたければ、それを知っ

ている人の所に行くべきです。神のところでしょう？神は私たちにこの聖書をくださった。聖書を通して私たちは神の真理を知ることになるのです。

ですから、私たちが神のみこころを知りたいと思うなら、私たちは神のみことばを見ることです。もし、あなたがだれかから「特別な体験を待ちなさい」と教えている人がいると聞いたなら、私たちが戻らなければいけないのは「神のみことば」です。神はみことばを通して私たちにお語りになるのです。みことばを通して私たちは神のみこころを知るのです。だから、みこころを知りたいなら、みこころを知るためには神のことばを学ぶことです。ジョン・カルバンはこう言っています「神の御旨（みこころ）は神のことば以外のどこにも求めることはできないからである。」と。皆さん、そのような思いをもってみことばを見ておられますか？私たちは「みこころ」ということをよく言いますが、神のみこころというのは必ずみことばと一致しています。みことばが「NO」と言っているものは「NO」がみこころなのです。私たちはみことばに照らし合わせてそれを考えないといけません。

パウロはまず「知恵」ということを教えます。神のことばを正確に理解することです。

2) 理解力 : 「理解力」とはそのみことばを日々の生活において適用することです。いろいろなことを日々経験するのですが、その最中であっていったいどういう選択が神の前に正しいのか、そのことをしっかりと見分けて判断し、そして、神のみこころに従って生きていくこと、そのことを教えるのです。

「知恵」と「理解力」、神のことばを正しく理解し、そして、それを日々の生活に適用して行くこと。しかも、ここに「霊的な」と書かれています。この「霊的な」ということばは新約聖書において最も知られている意味は「聖霊のもの、聖霊に属するもの」ということです。この文脈を見ると「あらゆる霊的な知恵と理解力によって、」とあるので、聖霊による知恵であり、聖霊による理解力です。私たちが神の真理を知るために、そして、その真理を日々の生活に適用して行くために私たちに必要なものは「聖霊なる神の助け」だということなのです。

パウロはここで、あなたも神のみこころがいったい何なのかをしっかりと見極めてそれに従う者になることができると言います。神のみこころを知ることができる、そのために必要なことは、私たちが神のみことばをしっかりと学ぶことであり、その真理をしっかりと理解すること、そして、それを日々の生活に適用して行くことです。それによってあなたは神のみこころをしっかりと見極める人になると言うのです。皆さん、私たちがみこころをしっかりと見極めるためには、神の助けが必要だということ、同時に、私たち自身にも責任があるということにお気付きになるでしょうか？

私たちがみことばを学ぶこと、それは私たち自身が決心しなければいけません。私たちがみことばを開いてそのみことばと格闘しなければいけません。でも同時に、神が私たちを助けてくださることによって、私たちはそれを理解できるし、また、それを実践することが出来るのです。神の助けが必要だし、私たち自身も神のみこころを知りたいと願って神のみことばを学ぶことが必要です。この二つのことはどうしても切り離すことができないものであることにお気付きになるでしょう。神の助けと私たち自身の決心です。

実は、パウロはこのことを他の箇所でも教えてくれます。簡単に見ていきましょう。前回、Iコリント3章で一番大切なのは何か？と見たときに3：7で「それで、たいせつなのは、植える者でも水を注ぐ者でもありません。成長させてくださる神なのです。」と、このことを教えてくれたパウロは、ピリピ人への手紙2章で信仰生活について語っています。ピリピ2：13「神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださるのです。」と。神はご自分のみこころのままに信仰者であるあなたの中に働いて、まず、あなたに志を立てさせと、そのように生きていきたいという思いを与えてくれると言います。そして、その思いをくださるだけでなく、事を行わせてくださるのも神だと教えています。確かに、私たちは信仰者として神のみことばに従って行くためには、この神の助けが必要だということがよく分かります。

その後を見てください。2：14「すべてのことを、つぶやかず、疑わずに行いなさい。」とあります。なぜ、このことが大切なのか？こう続きます。15－16節「:15 それは、あなたがたが、非難されるところのない純真な者となり、また、曲がった邪悪な世代の中であって傷のない神の子どもとなり、:16 いのちのことばをしっかりと握って、彼らの間で世の光として輝くためです。そうすれば、私は、自分の努力したことがむだではな

く、苦勞したこともむだでなかったことを、キリストの日に誇ることができます。」と。確かに、神が私たちのうちに働いて事を行わせてくださる、このような神の助けが備えられているのですが、私たち信仰者に全く責任がないわけではありません。神が言われたことを疑うなど言います。私たちは神が言われたことを信じてそれに従って行こうとします。その時に、私たちはこの世にあってすばらしい証を為すことができると教えているのです。確かに、神が私たちのうちに働いてくださり、私たちもそれぞれに与えられた責任をしっかりと果たしていくことが必要です。そうして私たちは成長していき、変えられていくのです。

もう一箇所是非見たいのはローマ書 12 : 2 のことばです。「この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。」と、日本語ではこのようになっていますが、原語では最初に二つの命令が出て来ています。「この世と調子を合わせてはいけません。」と「心の一新によって自分を変えなさい。」とこの二つの命令から始まるのです。「この世と調子を合わせてはいけません」という否定の命令と「心の一新によって自分を変えなさい」という肯定の命令が並んでいるのです。

(1) この世と調子を合わせてはいけません (否定的命令) : あなたはもう救いに与ったのです。あなたは新しくされたのです。「…古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」(Ⅱコリント 5 : 17)、ゆえに、この世の生き方に染まって歩んではならないと教えるのです。この世が奨励する生き方や考え方、この世の価値観など、そういうものに心を奪われてしまってはならないと。イエス・キリストを信じていない人たちと同じように生きてはならない。この世の人たちのことば遣いやその生き方、服装や様々な娯楽など、確かに、それらは魅力的かもしれないし、私たちの罪にアピールするかもしれないけれど、私たちは生まれ変わった者としてそういうものに調子を合わせてはいけない、そういうものに染まってはいけない、心を開いてはいけないと言うのです。では、どうするのか？

(2) 心の一新に心よって自分を変えなさい (肯定的命令) : この命令は新しくされた者にふさわしい生き方をしなさいということです。「心」と記されているのは、私たちの生き方と行動が変わるためには「心」が変えられ続けて行かなければいけないからです。「心」は私たちの行動を生み出すところです。しっかり聖書に立つことです。神のみことばに立つことです。みことばをしっかりと学んで蓄えてみことばを実践することです。この世の知恵ではなくて神の知恵に基づいて生きることです。

そして、もう一つ、日々自分を変えてくださる聖霊なる神にすべてを明け渡して、すべてを委ねて、主に用いていただくことを願いながらこの方に従っていくことです。この世ではなくて神のことばが私たちに支配するようになることです。

その結果 : これらのことを語った後で「いや、むしろ、神のみこころは何か、…」と続きます。今、二つの命令を見ました。その後で日本語では「いや、むしろ」と書かれていますが、その間に一つの前置詞が原語にはあるのです。この前置詞が意味するのは「目的あるいは結果」を表わすのです。つまり、もし、あなたが世と調子を合わさないのなら、もし、あなたが心の一心によって自分を変えるなら、こういう結果があなたに伴うということです。

その結果というのは「神のみこころは何かをわきまえ知る」ということです。「すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、」と、「わきまえ知る」とは「見分けることができる」ということです。つまり、この世から離れて神の前を正しく歩み続けている信仰者というのは、神のみこころを見分ける信仰者に変えられていくということです。いったい神は何を求めておられるのか？何をもって神を喜ばせることができるのか？何が神の前に正しいのか？その神のみこころを正しく見分けることができるのです。どうしてか？その人が正しく歩み続けているから、この世に染まることなく神のみことばに立って歩んでいるからです。

ですから、パウロは今見て来たように、コロサイ書と別の箇所でも同じことを言うのです。私たちの信仰は成長するのです。そのことを神は望んでおられるし、成長するために必要なものはすべてくださったのです。私たちが目指すべき「霊的な大人」とはどのような存在なのか？いったい何が神の前に正しいことなのか、神のみこころは何かをしっかりと見極めることのできる人です。そのような判断力をもって生きていく、そのような人へと神は私たちを変えていってくださるのです。そのために、しっかり

とみことばを学び、聖霊なる神に自分を委ねながらこの方に従っていくことです。そのときに神はあなたを変えてくださり、このような信仰の大人へと変えていってくださるのです。

B. 主のみこころを常に行う人になること 10節

10節「また、主にかなった歩みをして、あらゆる点で主に喜ばれ、あらゆる善行のうちに実を結び、神を知る知識を増し加えられますように。」と、このように二つ目のパウロの祈りが記されています。

1. 主に喜ばれる信仰者として成長すること

「あらゆる点で主に喜ばれ、」ありますが、それはこの人たちが「主にかなった歩みをして」いるからだと言います。この「歩み」ということばは「生活における振る舞い」のことで、「どう生きるか？」ということ、「どのように日々を過ごすのか？」ということです。あなたが職場で学校で家庭で教会でどんなふうに過ごすのかということです。「主にかなった歩み」の「かなった」という副詞は大変おもしろいことばです。このことばは新約聖書の中に6回出て来ますが、6回中5回は「ふさわしく」と訳されています。ですから「ふさわしく、～に値するように、～らしく」という意味です。つまり、信仰者は「主と同様に、主と同じように、救われた者らしく」同じ基準を持って歩んでいくようにと言うのです。

こういうことです、皆さん。私たち信仰者は完璧な模範をいただいたのです。イエス・キリストです。そのイエス・キリストによって救われた者らしく、そのイエス・キリストを信じる者らしく生きていきなさいということです。それがこの「主にかなった歩みをして」ということです。パウロはⅠテサロニケ2：12でも「ご自身の御国と栄光とに召してくださる神にふさわしく歩むように勧めをし、慰めを与え、おごそかに命じました。」と、神にふさわしく歩むようにと勧めたのです。

また、ヨハネもⅠヨハネ2：6で「神のうちにとどまっていると言う者は、自分でもキリストが歩まれたように歩まなければなりません。」と言っています。皆さん、みことばが教えていることをお分かりになりますね。イエスが歩まれたようにそれを模範としてあなたも生きていきなさいということです。もし、私たちがここにあるように主にかなった歩み、救いに与った者らしくそれにふさわしく歩んでいくなら、その歩みをご覧になっておられる神は喜ばれるということです。

なぜ、私たちは神のみこころに従って行こうとするのでしょうか？なぜ、私たちはイエスが歩まれたように神のみこころに従って行こうとするのでしょうか？このことが大切なのです、皆さん。その理由は「主が喜んでくださるから」です。主が喜んでくださるから、私たちはこの方のみこころに従って生きて行こうとするのです。もし、だれかがあなたに「クリスチャンとしてあなたが生きているその生き甲斐は何ですか？」と問われたらどのように答えますか？パウロにこの質問したなら恐らくきつこう答えたでしょう。それは「すべてのことを通して主が喜んでくださること、それが私の生き甲斐だ。それが私が生きている目的だ。」と。パウロ自身がそう言っています。Ⅱコリント5：9「そういうわけで、肉体の中にあろうと、肉体を離れていようと、私たちの念願とするところは、主に喜ばれることです。」と。

何を願って生きていたのか、何を生き甲斐にしていたのか？自分をどう楽しませるかとか、自分をどう満足させるかではなかった。彼はどうすれば神を喜ばせることができるか、そのことを考えてそのために生きていたのです。パウロはここで、私もそのように生きているからあなたがたもそう生きなさいと言っています。救いに与った者らしく、私たちの主であるイエスが歩まれたように、あなたがたも主のみこころに従って歩んでいくなら、あなたがたは主に喜ばれる者になると。こうして私たちの信仰は成長していくのです。

霊的な大人、霊的に成長した人とはどのような人か？その姿が見えて来たでしょう？その人は、どんなときでも、何が起ころうとも、いったい何が神の前に正しいことなのか、主のみこころはいったい何なのかを見極める人です。自分が何をしたいかではありません。どうすれば神が喜んでくださるのか、神の前に正しいことは何か、それを正しく見極めることができる人です。

2. 良い行ないにおいて成長すること

神のみこころに喜んで従う者、みことばを聞くだけでない、神のみこころをただ知るだけでない、それに従って生きていくことです。ですから、彼らは神に喜ばれたのです。みこころを求め、みこころを見出し、みこころに喜んで従っていく者たち、こういう人たちこそが霊的に大人だということです。もし、あなたが神のみこころを知り、それに従って生きるなら、あなたは間違いなく主に喜ばれる者にな

ります。信仰が成長すればするほど主に喜ばれる人としてあなたは成長していくのです。

残った短い時間ですが、もし、あなたがそのように歩むならこういう結果があなたに伴うということが四つ挙げられています。あなたが神の前を正しく歩いていくなら、みこころに沿って生きて行くなら、神が喜んでくださるだけでなく、あなたはこのような人へと変えられていく、成長していくということをパウロは四つ挙げているのでそれを最後に見ていきましょう。

◎主のみこころに従って歩むことによってもたらされる結果とは？

10節から12節に四つの動詞が出て来ます。

1) **実を結ぶ** : 10節「また、主にかなった歩みをして、あらゆる点で主に喜ばれ、あらゆる善行のうちに実を結び、…」、成長しているクリスチャンは、神の前に正しいことを行い続けていく者たちです。その人たちは神に喜ばれることをしようとするので、不正から離れて正しいことをしていこうとします。ですから、イエスがマタイ5：16で「このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。」と言われた通りです。私たちクリスチャンが罪に染まっていくなら、私たちはこのすばらしい主の証にはならないのです。私たちが人々の前で良い行ないをするなら、それはすばらしい証となります。でも、このみことばが教えてくれているのは、あなたが神の前を正しく歩いていくなら、間違いなく、その良い行ないにおいて成長するということです。あなたは益々良い行ないをする者として成長していくということです。なぜなら、その人が考えていることは「神のみこころに従うこと」だからです。言い方を変えるなら、神が喜ばれることをしようとするのです。間違いなく、その人は良い行ないにおいても成長しているはずです。そのことをパウロはこの10節に記しているのです。「あらゆる善行のうちに実を結び、」と、良い行ないをする者として成長していくということです。

2) **増し加えられる** : 10節の後半に「…神を知る知識を増し加えられますように。」とあります。私たちは神のおことばを通して神のみこころを知るのです。でも、みこころを知るだけでは成長はしません。そのみこころを実生活で活かして初めて成長するのです。私たちは神が全能だということを何十回、何百回と聞いて来ています。問題は、あなたが本当にそのことを信じているかどうかです。それはどんな時に分かりますか？そのような状況に置かれたときでしょうか？本当に神を信頼しなければいけない、すごく不安なことがあったとき心騒ぐときがあったときにどうしますか？支払いが迫っていたらどうしますか？いろんな状況を私たちは経験していくのですが、そのときに本当に神が全能なのかどうか、頭ではそう分かっているけど、本当に主を信頼して主がそのみわざを成してくださったときに、頭の知識から確信へと変わっていきます。多くの皆さんがそのことを経験されています。

神は「必ず必要を満たす」と言われた。確かに、神は必要を満たしてくださることを皆さんはいろんな機会に学んで来られました。その人たちは確信をもってそれを信じています。つまり、神を知る知識において成長するということです。ただの知識として神を知っているのではありません。日々の生活を通して神を知っていくのです。多くの人たちから、悲しみのどん底にあるとき神が私を慰めてくれるという証を聞きます。孤独の中にあっても神がそばにいてくださることがどれだけ心を励ましてくれたか、そんな証を聞きます。それは何が起こったのか？神が言われたことを彼らは実感したのです。問題は、神がそのように言われたけれど、私たちがその通りに受け入れたかどうかです。

ですから、こうして神はみことばを通して神のみこころを教えてください。私たちはそのことを心から受け入れて信じてそれに従うときにそれを確信として受け入れていくのです。霊的に成長した人はそのような確信があるのです。

3) **強くされて** : 三つ目は11節「また、神の栄光ある権能に従い、あらゆる力をもって強くされて、忍耐と寛容を尽くし、」と、この中にある「強くされて」という動詞です。神の力が継続して与えられ続けている様子です。「忍耐と寛容を尽くし」とあります。「忍耐」とは耐えることです、「寛容」とは人に対することです。恐らく、どちらも困難に関連しています。いろんな困難の中にあっても忍耐と寛容を働かせるのはその人が神を信頼しているから、自分の信頼している神を知っているからです。辛いことがいっぱい出て来ます。分からないことがいっぱい出て来ます。でも、私たちはその中で平安をもって歩めるのです。その中で喜びをもって歩めます。なぜなら、私たちはその問題の背後におられる全能の神

を見るからです。

なぜ、使徒たちは初代教会において迫害されることを喜んだのでしょうか？なぜ、パウロとシラスはピリピで投獄されたときに、しかも、彼らはむち打たれてからだに傷を負っているにもかかわらず神への感謝をささげていたのでしょうか？なぜ、神を賛美していたのでしょうか？神がそのように彼らを導かれたのです。辛いことがあっても悲しい苦しいことがあっても、その中で私たちは喜ぶことができるのです。では、いったいその力はどこから来るのか？「私はもう少し自分の意志を強めて…、私の信仰を強くして…」と言うなら、それに皆さんが希望をかけるのなら、恐らく、いつまで経ってもパウロたちのような領域には到達しないでしょう。彼らはそのようには生きなかつたからです。

彼らがしたことは、彼らは自分の力がどこにあるのかをちゃんとわきまえていました。そのような困難に勝利する力が自分のうちにあるのを知っているのです。勝利する力は神のうちにあるのです。それを知っていたのです。ですから、みな神のところへ逃げ込んで行くのです。神に助けを求めるのです。そして、神のみこころが成されるのです。少なくとも、状況が変わらなくても自分たちの心が変わったのです。このみことばをもう一度見てください。「**栄光ある権能**」とあります。この力は神の栄光ある権能であると言います。つまり、神にはご自身の御力を行使する権利があるということです。パウロが言うことは、神はどんな状況でもご自身の願うことを為すその権利を持っているということです。

もちろん、私たちが願ったから問題から解放されるかどうかは分かりません。でも少なくとも、神はどのような状況にあっても私たちに平安をくださると約束されました。初代教会のクリスチャンたちを見たときに、彼らは神の前に祈ったから迫害がなくなったというわけではありません。ローマが転覆したわけではありません。問題は一向に変わっていなかった。でも、彼らの心は守られていました。彼らは平安をもって歩み続けた、彼らは確信をもって歩み続けました。だから、パウロは確信をもって言うわけです。「**神の栄光ある権能に従い、あらゆる力をもって強くされて、**」と。

信仰者の皆さん、私たちはこの神の力によって守られているのです。ですから、信仰が成長すれば、そのことを知るだけでない、この神に信頼を置いて生きるのです。どんな状況にあっても絶望のどん底にあっても、希望という光が全く見えなくとも、信仰において成長している人たちは力ある神を信頼するのです。パウロが言ったように「**また、神の全能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力がどのように偉大なものであるかを、あなたがたが知ることができますように。**」（エペソ 1 : 19）、皆さん、こうして活字では見えても、私たちはまだその力を知っていないのです。私たちの神は何もないところからこの宇宙を、この宇宙のすべてをお造りになった。イスラエルの歴史を見ても、神には不可能と思える状況にあってもどんなこともできるということを証明してくださった。そんな神を私たちは信じているのです。その神の御力が現わされるのです。

私たちはその機会を求めるだけでない、そういう機会に遭遇したときは神の御力が現わされることを信じ期待するのです。そんな信仰者がどれだけいるでしょう？私たちの群れにはそういう信仰者がいたのです。彼らの信仰は私自身も励ましてくれました。彼らは何があっても神のことばを疑うようなことはしなかった。神のことばに立って、このみことばが教えるから、神は全能だからと、その信仰をもって歩み続けた。そういう勇者たちがいたのです。今、その勇者がどれだけ残っているか？です。また、どれだけの方がそんな勇者になりたいと願っているか？です。あなたが強くなるということではありません。強い力である神に働く機会を私たちは提供するのです。この神に働いていただきたいのです。そうすれば、この神だけが栄光を受けるからです。

だから、もしかすると、今、皆さんが置かれている状況はすばらしい祝福の状況かもしれません。でも「私は希望が見えない」と言うかもしれません。「全く喜びを失ってしまいそうだ」と言うかもしれません。でも、神に信頼を置いた時に、少なくとも、そのときにあなたは神のみわざを期待できるのではありませんか！あなたの力は神なのです。あなたの力はあなたのうちにあるではありません。神のうちにあるのです。信仰において成長している人たち、この人たちは神がどんな方かを知っています。そして、その神の力に依存して歩み続けています。その点において彼らは成長しています。

4) 感謝をささげる : 四つ目は 12 節「**また、光の中にある、聖徒の相続分にあずかる資格を私たちに与えてくださった父なる神に、喜びをもって感謝をささげることができますように。**」と、相続のこと、神の祝

福のことです。神がくださった祝福を心から感謝しているということです。この「感謝をささげる」というのが四つ目の動詞です。つまり、霊的に成長している人というのは、どんなときでもどんなことでも感謝する人です。なぜなら、感謝というのは私たちがしなければならないことではなくて、神がさせてくださるものだからです。私たちが神のみこころに従って歩んでいるなら、私たちの内側から感謝が溢れ出て来ます。だから、このように言えます。感謝が溢れ出ている人たちは神のみこころに沿って生きている人たちだということです。自分自身の信仰がどうなのかとその歩みを吟味したければ、自分のうちに感謝があるかどうかを見ることです。感謝するというのは神のみこころです。

最後に、Iテサロニケ5：18を見てください。「すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。」、注目していただきたいのは「望んでおられることです」ということばです。今日、私たちはコロサイ書1：9から「神のみこころに関する真の知識」と、「神のみこころ」について見て来ました。この「神のみこころ」ということばが今見ているIテサロニケ5：18の「望んでおられる」ということばと同じなのです。日本語訳は違いますが、同じギリシャ語が使われているのです。つまり、パウロは「すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。」、これが「神のみこころなのです」と言ったのです。

いろいろなことがあっても私たちは神に感謝をします。皆さん、思いませんか？神がいつも傍にいてくださることがどんなに感謝なことか、この神が与えてくださった約束がどんなに心を慰めてくれるのか、どんなときも私たちを離れることなくともにいてくださる。だから、私たちはこの神に何とか喜んでいただきたいと願って、この神が私たちに与えてくださったみこころに従っていこうとするのです。みこころに従うために私たちはみことばを知らなければいけないと言いました。詩篇の著者がちょうど、私たちが学んだことをこのように教えてくれています。詩篇40：8「わが神。私はみこころを行うことを喜びとします。あなたのおしえは私の心のうちにあります。」と。

時代が違って場所が違ってみな同じように生きたのです。神のみことばを心に蓄えて、そして、その神のみこころに従っていこうとしたのです。その歩みを神は喜ばれたのです。まさに、その歩みこそがその人が霊的に大人であるということを証明するのです。

あなたの信仰はいかがでしょう？どんなときにも神のみこころを求めながら、そのみこころに喜んで従っていくという、そのような信仰者としての歩みをしておられるでしょうか？そのために神のみことばをしっかりと学び、そして、このみことばから神のみこころを見出してそれに従おうとしているでしょうか？あなたが生きている目的はこの神を喜ばせることです。その目的のみを掲げて歩んでおられますか？

神が喜んでくださったなら私たちは嬉しいのです。それが私たちがこの地上に置かれて与えられたこの日を生きるその目的です。どうか、そのように歩んで神の栄光を現し続けていきましょう。みこころに従うことのみです。それ以外の方法で神の栄光を現すことはできません。そのような歩みをこの一週間してください。